

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

どんな障害者も友達

鎌倉市立岩瀬中学校

二年 原 有穂

小学生のときに、耳が不自由な子と出会った。彼はいつも特別学級で勉強し、週に何度か一緒に授業を受けた。しかし、彼と仲の良い友人は少なかった。なぜなら、彼と接するには手話を使わなければならなかったからだ。私は手話に興味を持ち、簡単なものから覚えていった。彼と初めて会話したときはとても感動したし、次第に彼とも仲良くなれた。頼ってくれるようになってからは、給食と一緒に食べたり、一緒に授業を受けたりするようになった。私も手話の本を買って何度も読んだり特別学級の先生から教わったりした。私たちは誰がどう見ても友達だと思っていた。

ある日、友達に

「三年生になってから急に彼を手伝うようになったけど、先生から頼まれたの。」

と尋ねられた。私はとっさに、

「ただ好きでやっているだけで、頼まれてないよ。」と答えたが、本当はびっくりしていた。自分では友達の間で感じた。でも周りから見ると、それは障害者を手伝う仕事をしている人だった。また別の友達からは、

「世話をすることが好きなんだね」

と言われた。たしかに幼児の世話をすることは好きだ。でもそんなつもりで接しているのではない。私はその後、彼とこのままの接し方で良いのか悩んでしまった。彼は耳が不自由なので話すことができない。だから、彼は私と仲良くすることが周りから仕事だと思われる事を知らないし、実際友達だと思ってくれているかどうかともわからなかった。とはいっても、わざわざ先生が席をとりにしてくださったり様々な配慮をしてくださったので、突然友達をやめるなんてことはできなかった。私も友達でいたかった。だから、友人に尋ねられたことは無かったことにして、普段通り仲良くしていた。

今、私たちは、障害者を障害者としかみれていないと思う。障害をもっている人を、可哀想とか、周りの人は大変だろうとか考えて、「助ける」とか「手伝う」ということばかりしているのではないだろうか。そして、自分は本当に良いことをしたと思ひ、周りの人も「手伝っていてえらい」「優しい人だ」と思うにちがいない。もちろん、これは本当に良いことだし、こんな行動をした自分を誇りに思ってもいいと思う。でも私は、障害者も「友達」として接

するべきではないかと考えている。つまり、障害者は「少し不自由なところを持つている友達」なのだ。障害者を障害者とみていると、それは行動すべてがお手伝いになってしまふ。例えば、その人の教室へ二人で歩くと「送り届けてあげた」ことになるし、授業中先生の話を手話で訳すと「先生のかわり」になってしまふ。でも、これが友達としての行動なら、その人の教室へ二人で歩くことは「普通のこと」だし、授業中先生の話を手話で訳すことは「勉強を教えている」だけだ。みんながこの考えを持つていけば、障害者の方々と私たちはもつと身近になれるし、わかり合うことができると思う。私が小学生のときに経験したことは、友達が障害者を障害者としてみていたからあんなことを疑問に思ったのだろう。私は、もつと色々な人に、障害者について深く考えてほしい。どんな重い障害を持つていても、同じ人間だから友達だ。とはいえ、やはり普通に接しようとする中でわかっていても、難しい部分はあると思う。でも、相手に対して「障害者じゃなくて、友達として接しよう」という思いは、きつと相手にも伝わっている。だから私は、たくさんの人に、この考え方を伝え、障害者への理解を深めていってほしい。